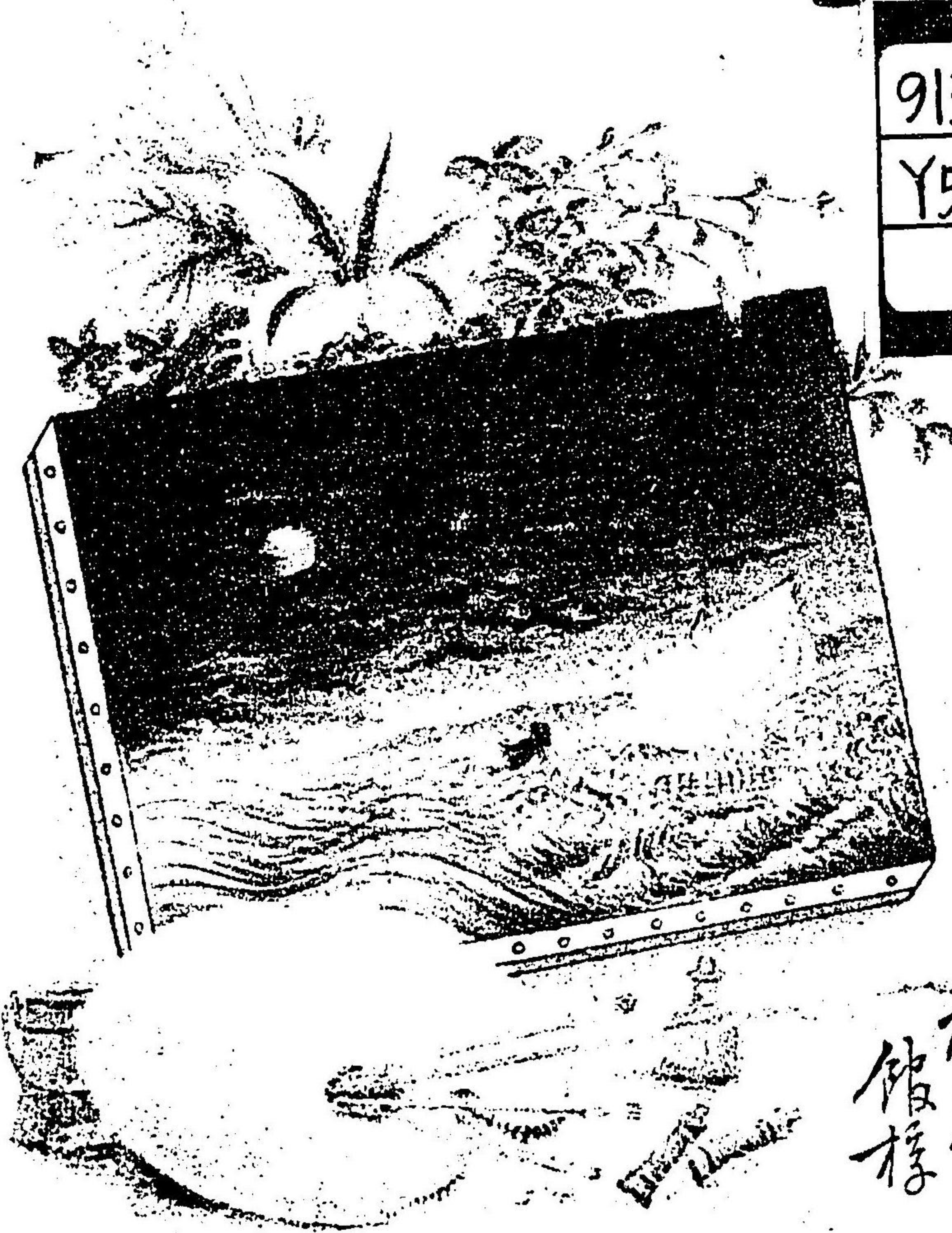


天竺德兵衛實記



913.56

Y533x

091123-000-1

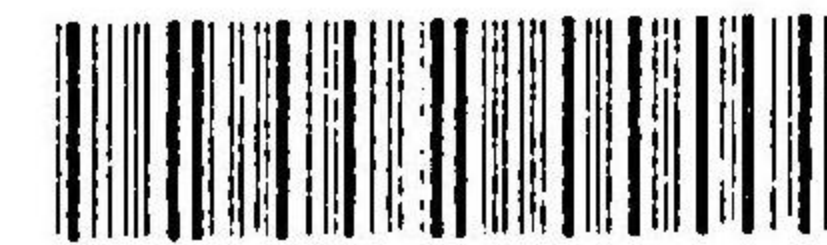
913.56-Y533t

天竺德兵衛實記

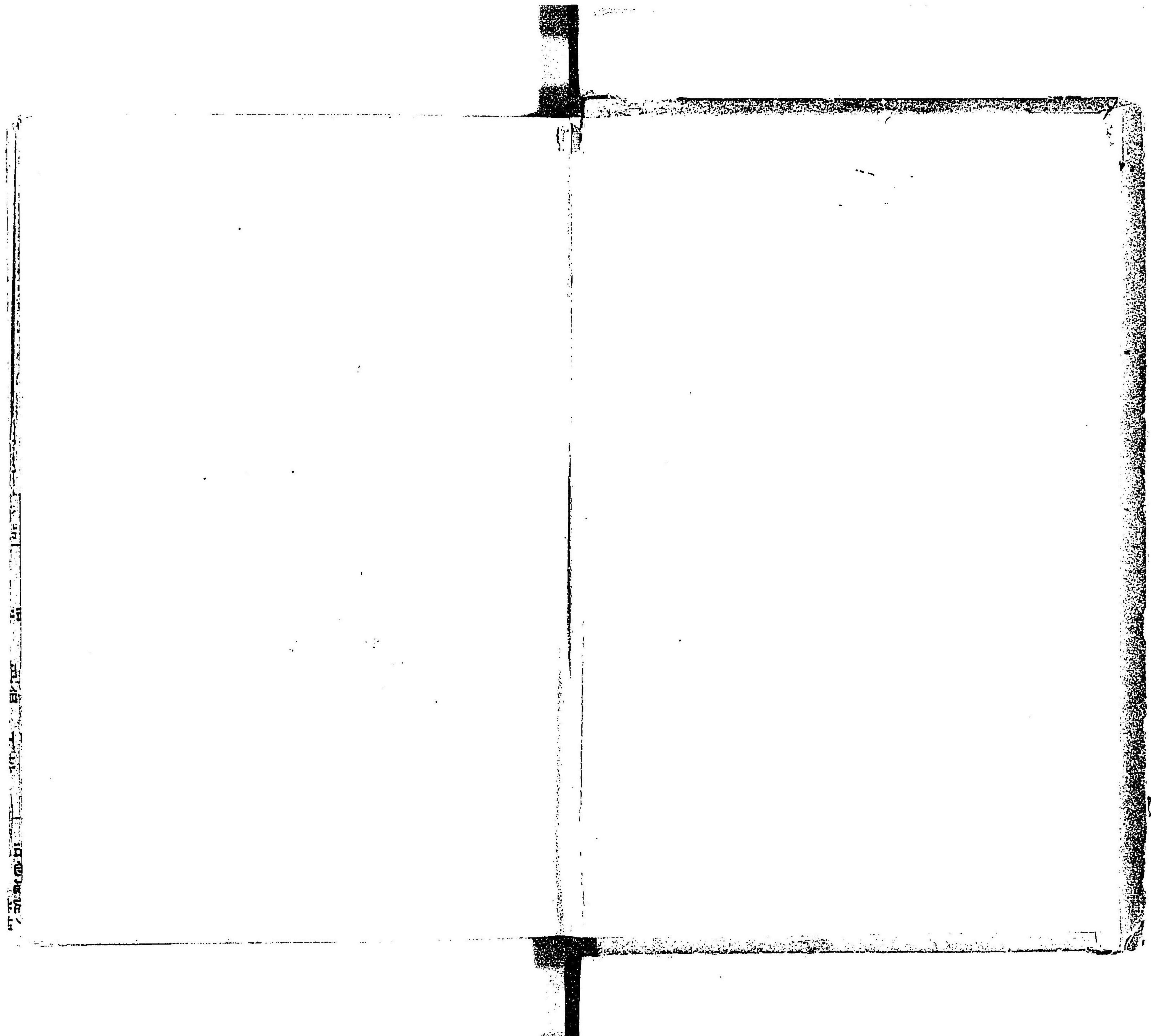
柳沢 武運三/編

M21

DBN-1928



福急 館標



天竺德兵衛實記目錄

- 昔時日本外國と通商せし條
- 天竺德兵衛幼少擧動の條
- 德藏京都角倉の處に奉仕する條
- 德兵衛高松清兵衛に件れ印度に赴く條
- 角倉船長崎を發して支那に至る條
- 德兵衛安南に在留する條
- 同暹羅の釋迦大像を見る條
- 並 緬甸國王の行幸の事
- 德川家光上洛の條
- 並 大坂堺地子銀を免す事
- 御朱印船航海廢止の條
- 德兵衛了庵が處女環と深く契る條
- 幕府寛永通寶の新錢を鑄る條
- 並 德兵衛環京都を脱走する事
- 德兵衛環大坂に卜居して婚禮を成す條

肥前島原賊徒暴動の條

- 德兵衛長崎に於て難風に偶ふ條
- 並 沈玉芝德兵衛が危難を救ふ事
- 武右衛門義心環德太郎を養育す條
- 德兵衛天竺錫蘭島へ赴く條
- 並 德兵衛日本へ販國の事
- 德兵衛來舶品商業を初る條
- 並 偷賊妖術を以て人を惱む事
- 孀婦阿花甲幹喜造を猶子せんと爲す條
- 善助天王寺屋の家を補佐する條
- 甲幹喜造丸山の娼妓八重梅が色に耽る條
- 善五郎天王寺屋の戸主と成る條
- 並 孀婦阿花不行狀の事
- 德兵衛孀子德太郎の家督を譲る條
- 並 德右衛門隠元禪師に謁す事
- 赤穂屋德兵衛子孫繁榮の條

目錄 畢



21941



稗史 小説 福老館出版書目 賣捌書肆

大阪心齋橋通安堂寺町田中太右衛門
大阪心齋橋通順慶町此村庄助

- 孝子復讐實錄
- 敵討御堂前實記
- 敵討崇禪寺馬場
- 箱根權現燈仇討
- 鏡山復讐實記
- 板垣君近世記開
- 八百屋於七胡蝶夢
- 白子屋於熊之傳
- 煙草屋喜八之傳
- 敵討與平義勇傳
- 身延山利生記
- 繪本柳荒美談
- 宮本武藏英雄傳
- 三十七信孝松平長吉郎傳
- 淀屋辰五郎實記
- 櫻田血染の雪
- 才子政海廼寫眞
- 政治實地演說
- 明治壯士の運動
- 社會花街廼英語
- 天竺德兵衛實記
- 敵討篤塚實記
- 柿木金助實傳
- 石川五右衛門實傳
- 弘法大師一代記
- 金毘羅粟毛
- 宮島藤栗毛
- 錢屋五兵衛實傳
- 菅呂利新左衛門傳
- 田沼騷動記
- 明治二 夢惣兵衛開明物語
- 十三年 通俗軍役奇談
- 左甚五郎實傳
- 政治國會後日本
- 敵討肥後の駒下駄
- 社會滑稽大演舌會
- 通俗繪本三國志
- 鈴木主水白糸實記
- 春色しり物語
- 於俊傳兵衛實記
- 俠客五人男傳
- 稻葉小僧實記
- 日本駄右衛門實記
- 小倉騷動雙忠傳

天竺德兵衛實記

柳澤武運二編輯
舊邦堂陳人校閱

○昔時日本外國と通商せし條

我日本海外各國と通商なすと既に往昔より有りて殊に豐臣氏の治世の時西海の估客多く支那國及び西比利亞呂宋後印度の安南暹羅前印度等に航海して貿易する事繁し而して後ち德川氏の世と成ても之を免許有いて慶長六年安南東埔塞等始めて幕府に書を奉る又御朱印船と號ぐる海船九艘有り此船の形ちと略支那の海船に髣髴たりしとど其船を造り航海通商の免許を蒙る者り肥前長崎の船本某末次某荒木某京屋某に五艘を所有し和泉堺津の伊豫屋某に一艘京都にて茶屋某角倉某伏見屋某各一艘づゝを所持せしと云へり此七名の商人を始め其他の買客も朱印船の便を得て緬甸暹羅安南等に年々航して通商なすこと絶ず此ころは紙帳帳日傘雨傘等多く貿易品と成りしとど御朱印船海外各地に航する事三十有三年あして止み寛永十二年德川幕府(三代)家光公長崎府尹に命じて航海互市を嚴禁令ひ其後ち年月

を歴て幕府長崎港に於て支那荷蘭兩國而已來舶を許し互市場と定め邸地を與ふ而して久しく兩國の通商陸續す歐米各地の海船邂逅ふ航し互市を請と雖も之を許さず然るに近曾五港の互市場設けられ舊制を改め歐米各國と通商の條約有りてより英佛魯以米國を始め諸邦來舶して貿易盛んと成り輸出入品年々に倍し親陸交際を爲て國中開明歲々に進み商人勉勵を爲て富み工人奮激して模造を製し發明品を出し老少知識を増すは是明治聖代の恩化成べし扱天竺と字せる船人徳兵衛ハ天京で伶俐活達の性質文學を嗜みし的にて京都角倉氏が御朱印船の船長高松清兵衛に属て印度(天竺)へ航海せしにて演劇狂言或ひは講談等に取なす妖術をつかふ強盗あり決して非ぞ現古寫本故老の傳聞によりて其實を此に記せり看客此書を以て實譚と爲し演劇講談の附會虛妄の説を以て誤り玉ふこと勿れ

○天竺二徳兵衛幼少舉動の條

今より二百九拾年計り昔時と成る日本紀元二千二百六拾年の頃播磨國加古郡高砂邑船頭町に卜居せる赤穂屋徳左衛門と呼べる船人あり少年の時より諸國廻船の水主に雇これ日本海路の事を熟知し性活達にて剛毅あるが故豊臣氏の軍艦に乗て水主の業を爲すよと數々な

りし然るに文祿元年豊臣太閤秀吉公朝鮮を征伐の際播磨國高砂に住せる水主一百人を徴し朝鮮出軍の艦に乗らしむ徳左衛門其時年未だ若く十九才にて名も徳松と云ひ一百人の水主徴募の中に加はり朝鮮釜山浦に航せり而して慶長三年朝鮮飯陣の際其途中於て逆浪の爲に兵艦覆へりて一百人の水主九拾六人溺死し徳松は運強かりしや難風高波の中を凌ぎ泳ぎて命を全ふす之徳松二十五才の時なりき(九十六人の溺死せる者の菩提の爲とて石塔婆九十基寶篋院塔一基を高砂邑中十輪寺に建て高砂の地子錢永世免許あり)其年徳松名を徳左衛門と改め翌年同郡別府より妻を迎へり其妻阿磯二年を歴て分娩と雖も夭し其後ち男女の子を産ども尙早世して生長せせ而して慶長十七壬子年妻阿磯一男兒を産み小字を徳藏と名けり之成人の後ち天竺徳兵衛なり徳藏生立に隨ひ才智衆童と勝れ性活潑めて且物に恐る、事無し又事物を教ゆるに記憶よく一を聴て十を知る然れを父母親戚太だ愛し邑人等奇童なりと云とやせり徳藏七才の春同邑の書家へ入門致させけるお一周を歴せして筆法を能整のひ他の童べくり進歩なす事速し三年にして能く日用の文字を書したり當時高砂の地は備播淡三州の大守池田少將輝政の管轄にて其嫡男池田武藏守輝貞が代理として家臣日置豊

前守々護職と成て城に籠れり(此城郭は元和年中に破却す)守護職の藩臣の壯士少童など四月の頃より海岸に集まり水泳ぎの業を爲すに邑童も其地に至り俱々海中入て泳ぐよとを許せり依て徳藏も之を爲す未だ十才に満ずと雖も能く泳ぎ年を累ねて數町を泳ぐに衆あ優れり又小舟お打乗航海なす事を覺ゆ十二才に至てと東方は明石沖西方は飾間津の邊に漕行を難しとせず風波の烈敷も恐怖こと無し將十輪寺の僧侶徳藏が俊才を愛で讀書を教ゆ徳藏之を好て一日も怠惰よと無く能く學びたり寛永の二年徳藏十四才と成り讀書算術航海水練の藝に熟くしたり爰お高松清兵衛と云る者あり同國の産にて船乗を業とす清兵衛徳左衛門が妻阿磯の徒兄なれば時々訊問ひ來り徳藏を慈愛ひこと我子の如く成まとぞ

○徳藏京都角倉の度々奉仕する條

徳藏が外戚の伯父高松清兵衛は角倉與一郎が所有なる彼御朱印船の船長を爲がゆゑお此頃京都に移住せり清兵衛平常お徳藏が才子なるよ邑里お生立を惜み時を得て京都へ招き己が主家角倉に奉仕させあば末々父徳左衛門に優れる身と成なんと思へり然るに寛永二年秋八月時の將軍徳川(三代)家光公前將軍秀忠公行粧美々敷入浴の由聞ければ是呼とせんお幸い

の事こと清兵衛と信書を高砂に送り徳左衛門父子を招きしのは頼に出途して京都お來れり清兵衛は怡悦て宅に滞留させ兩將軍の參朝九月六日の聖上二條城へ行幸あるをも巷上に伴あひて拜せしめ猶角倉へ徳藏を奉仕させん事を清兵衛徳左衛門と協議して徳藏を角倉へ見へさせしのを主公與一郎の氣に適ひ徳藏は小僕と成りて仕へたり角倉氏は京都に累代卜居せる大家にて當時の戸主與一郎立之と藤原惺窩の門に入りて文學に長玄平日お儒書講義を爲し在京の儒士を友とあしぬ其父了以は工役をたくみに爲し既に慶長九年に美作の和計川の通船を見て工夫を爲し洛西嵯峨里ある大堰川に丹波の保津より通舟自由に爲んと之を幕府お願ひ許可を得て川中の岩石を碎きて舟路を設く是慶長十一年三月より八月に至り全く成りたり而して同十二年幕府の命せを奉して駿河の富士川を浚へ十三年信濃の天龍川を浚へ又伏見の里より京都へ舟の通する爲に高瀬川を穿つ之了以の功績よして今お口碑に傳へり又徳藏と角倉に仕へてより元來好める道なれと主人與一郎に儒書を學びて知識を益たり而して寛永七年徳藏角倉よ於て元服して名を徳兵衛と改め甲幹と成りて忠勤せり

○徳兵衛高松清兵衛に伴れ初て印度に赴く條

斯て寛永十年酉の春一月初旬角倉が家ふと今度と御朱印船を印度へ發さんとて其準備頗る成りしに從前朱印船中の書記係りの甲幹藤兵衛と云者客歲より病疾又臥今春未だ全快爲す依て誰か其代理を勤むる者を定めんと朱印船係りの重甲幹及び船長高松清兵衛等衆議をなすと藤兵衛の代理に相當せるものと徳兵衛ならでは他無と云へる者多く此由與一郎へ支配人重右衛門より示談爲けれと與一郎も徳兵衛こそ適當の的あれば然る可し渠に申付け何かの手順等と藤兵衛より聞取せよと命之ければ重右衛門は此儀を徳兵衛に示せと大悦きて藤兵衛が病床に行て航路諸般の手順を委曲聞とりて其準備を爲しけり時に徳兵衛甫て廿二才の芳節の事なりし當春同時に發船をなすものと同京都の茶屋四郎治郎が所有船と長崎港の住船本氏同所京屋の所有船と都合四艘成しとぞ船長ある高松清兵衛の揖取役作右衛門水主頭甚三郎に命之て水主の雇ひ入れ及び荷物箇數の多少且便船を得て航海なすの乗客估客などの手配りをも悉皆く注意させ船具荷物等高瀬の川舟を以て伏水に出し淀川通船に積移して大坂沖に碇泊す朱印船へ積込たり而して一月の七日角倉が厦に發途の賀宴を爲し船長清兵衛書記計算係り徳兵衛を始め揖取り水主長水主の面々支店の戸主支配人甲幹等大

一座めて酒宴大盛會を爲し同日黄昏に清兵衛徳兵衛と主人與一郎に暇を請ひ全家の各人に別れを告げ水主等を具し乗客を促して高瀬舟に乗り伏水より淀船にて大坂へ下り翌朝又大坂角倉の藏所問丸に着して其日は各人住吉神社に詣り神樂を捧げて航海無事を祈り同月十日大坂港を出船して高砂の沖を懸け清兵衛徳兵衛は扁舟に打乗り船頭町なる赤穂屋あ至り徳左衛門阿磯を對面あすむ双尊共徳兵衛が重き役を主人より命せられしを恰々是全く清兵衛の庇陰なりとて徳兵衛に示し酒宴を爲し清兵衛を饗應し其背と兩人とも赤穂屋に泊ま次の日別れを告げて海船に乘移り碇を上げて順風をうけ海路を走りて同年の二月下浣に長崎に着し同所府尹廳へ航海鑑札の檢査を請ひ三月の中浣に免許を得て長崎を出港して支那國上海として船を進めり

○角倉船長崎を發して支那に至る條

角倉船は長崎の港を發し順風に帆を上げて日本海より黃海に航りて寛永十年の五月の上旬に支那國揚子江に來着せり當時明の崇禎六年にて上海の地も現の如くならせ人家も少あし然れ共徳兵衛初めて航海の事なれば清兵衛は水主に命じて扇舟の準備をさせ徳兵衛を乘し

め乗客京都の丁香屋幸介大坂天王寺屋武右衛門等を誘ひ揚子江を沂りて上海港に至り七名
 上陸して市街を徘徊し猶南京の名勝地を見せける。徳兵衛は視に聴に一として珍しうらぬ
 者あく大に興を催はしぬ然れど街上を歩むに何と無き悪臭臭氣の鼻に觸るに困りける。ど
 而して南京の旅亭黃鶴館に宿る。客室の分野も日本と異なれを珍しと思ひ支那料理の事
 より總てのまどを徳兵衛は悉皆く筆記せり此地之通商の用も有らざれを日數僅かにして上
 海に飯り扁舟を打乗り海船に迂り揚子江口を抜錨して寧波港に海船をよせ上陸して此地に
 於て貿易を聊示なし徳兵衛と寺院等の壯麗成を遊覽し當港を發して厦門を寄せたり一
 日徳兵衛海船の舳より望遠鏡を以て對ふを視る。海上に一の島あり徳兵衛水主長甚三郎と
 呼び問て云く彼に見ゆる島は何島と云ひ何成地ぞと甚三郎應へて彼は臺灣(タイワン)と云
 島にて住民甚だ惡氣の地。侍ふと徳兵衛聞て其は行て見ん扁舟を準備なすべしと甚三郎水
 主を呼び其準備を爲さしむる時。右衛門傍に來りて徳兵衛ぬ一何國に行玉ふぞ上陸に
 侍らふやと云と徳兵衛頭をふり否々上陸なすに非ず對ふ見ゆる臺灣の地を見に行可しと
 作右衛門眉を顰め其れ成れを止玉へ彼島に住める者甚だ氣あらくして他邦の者と見れば小

銃を打のけ或ひい舟に乗て來れる舟を追ひ暴動し又人々喰ひ付く事も有れを必らず行玉ふ
 など云ふを徳兵衛も甚三郎も冷笑ひ其と臆病と云ふ者なり斯我等數千里の波濤を凌ぎ航海
 なすみ人氣暴惡の地を恐れては爲がたき事なりとて作右衛門が言を用ゐずして徳兵衛甚三
 郎は扁舟に打乗り水主等と檢糧を動かせて元船を離れ遙々沖へと漕出せり而して臺灣島に
 近づき山岳の樹木も能く見へ海邊の人家も遙に見ゆる時海上に小舟を浮め魚漁を爲し居る
 臺灣人徳兵衛等が乗たる扁舟を見るより驚愕し容体みて魚漁を止め櫓を速くこぎて陸地
 飯れり徳兵衛と臺灣人の容の異なるを見て興じ船を猶進めさせける時臺灣人十艘をかりの
 舟に打のり徳兵衛等が扁舟を目的に迅速漕ぎ寄るを未だ悟らざして魚漁の舟と思ひ居りし
 が然は無くして小銃携へ或ひは槍劍など手お持てるを甚三郎と疾く認め徳兵衛に對ひ作右
 衛門が云し如く漕來る舟を見玉へ各人兇器を携さへたりと云に徳兵衛を確と見て是は大事
 あれ早く避んと水主に命じて厦門の方へ漕戻すに臺灣人と遜さトと彌々進んで小銃を放て
 共其間遠く彈丸達せを徳兵衛甚三郎水主等も其難を遁れたり時から一艘の小舟に作右衛門
 打のり急ぎ漕來る。出會ひ作右衛門の謂く船長陸より船に飯られ各人臺灣へ行玉ふと聞大

に驚愕僕も命じ急ぎ迎來る可しと何も恙が無ししかと云ふ甚三郎は爾々にて今潜戻す時成
と云るを聞て作右衛門其は危ふき事にて有し然ば僕始より止めしありと云つ、兩舟並べ
ぎ廈門港へと販りけれと船長清兵衛徳兵衛を呵り爾後我が免さぬ方へと行玉ふき若過ら
らと我而已成らず主人の名を出て面目を失なふに至れり甚三郎も又我指揮を受きて自由
の働さ爲へからせ將來屹と慎む可しと命じたり

○徳兵衛安南に在留す條

斯て角倉船は廈門より支那海を航し香港に碇泊すと事二箇月許り而して同年の十一月に後
印度安南の地に着港せし安南と一に交趾支那共稱して其國內廣く従つて人口も多く豊饒の
地されと草木の類繁茂し米穀乏しならず良材に充ち礮山に銀鐵を出と然ば住民富をなし互
市も當時盛大よして日本估客多く此よ來りて貿易せり當港には茶屋船長崎の船本船同京屋
船も來着し且和泉堺の伊豫屋船も昨年より此に碇泊と然れと徳兵衛と半年餘りも乗組の他
日本人を見ざりしが今此地に來て多く見へるを怡悅同じ京都の人も有客れば偶ては互ふ故
郷の談話り等せし船長の高松清兵衛京都大坂近江の商客等は積來れる荷物と陸地に揚げ互

市場に於て之を他の商人と競ひ買り或ひと國産の鐵砂糖材木藥種陶磁器及び其他の産出品
をも買入ける徳兵衛は物貨の出入會計の事を書記すに此に至りて太忙しく然れと寸暇も無
に非ねば清兵衛或ひは在留の日本人と同行遊歩し首府「フエー」の王城の結構を覽又寺院の
壯觀山岳水邊の勝地を映り又瀾滄の大河の宏大ある流れをも見て賞せり而して日本寛永十
年支那の崇禎六年も暮に及びぬ此國の貴賤共に佛教を尊崇すが故に釋迦を頗ぶる敬まひ
例歳十二月八日は往古釋迦雲山に於て修行し衆生濟度の爲る出山せられし日なれを今日と
寺院は言も更なり官民家とも菓粥を炊ぎ釋氏に供じ家族食せる事支那北京と異なること
無く旅舎も是を客人に進めり徳兵衛は未だ之を知らざりしかを甚だ珍らしく思ひて筆記せ
しとぞ（此菓粥は日本の寺院に於ても十二月八日に臘入がゆ又は温糖粥と稱して炊くな
る粥を米あはせ）而して年末の有様迎歳の設けも北京と粗ひとしく年糕を毎戸に製し（本
人餅をつきて神供か）桃符を門戸にかけ歡樂紙を貼付萬年糧（日本に古く正月に製す）を
製し又響 炮花 炮を毎宵家々に放ちて邪氣を逐へり（響炮花炮とはな）是等のまども徳兵
衛は奇とせり當港に現碇泊せる日本の海船在留せる日本人は吾國の例式を用る船には雌雄

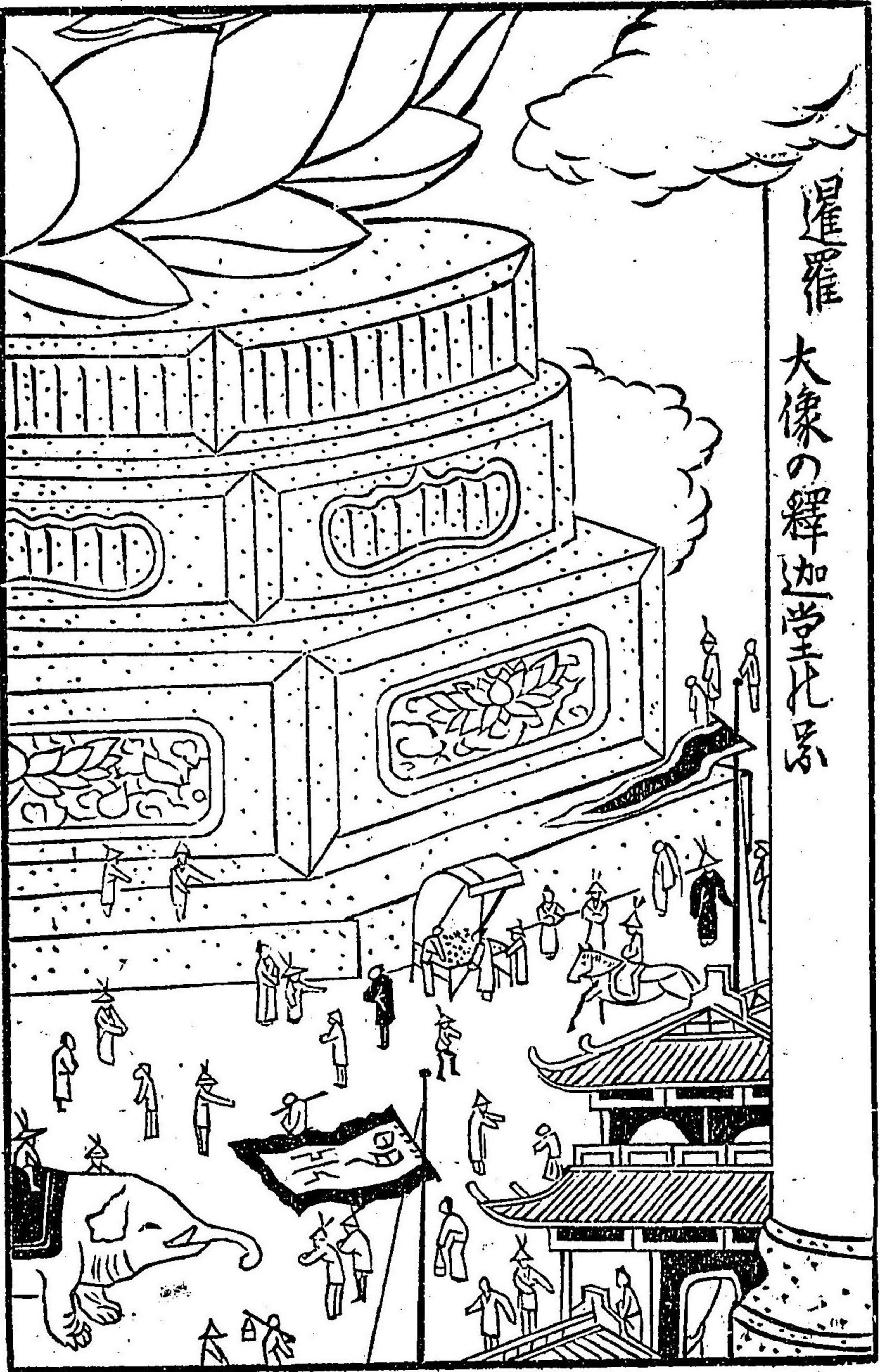
の門松を立て米俵の藁わらめて水主七五三繩ななごころを造りて張り餅もちを搗きて神供の饅餅まんべい又雜煮ざしゆに用る餅を製せる事日本の地に在が如ごとく爲し翌年正月の元旦あけふたに至れば乗客船長書記者しやくしやくしやく揖取水主に至る迄朝日を拜し船長及び船人等ふねびと船玉神を拜禮し又船持の主人を遙はるに禮し終りて互に新年の賀辞がじを述て禮を竭つくし雜煮を祝いわひ酒宴しゆゑんを爲し水主等は太鼓たいこを鳴なして目出度船歌めいしゆくたを唄うたひ離はなせること各船同一にて各人禮服れいふくを着して扁舟へんしゆに打うのり互あひひは船船へ年始の禮れいを巡めぐり此事このこと竟おて後ち船長書記等は上陸じやうりくして官府くわんふに禮し旅舎りよしや知己の宅たくに訪問ほうもんす乗客の商人水主等も僉陸あがり各人知己の宅たくも行て新歲しんさいの禮を爲して酒宴しゆゑんを催もはすも有れを又土地を遊歩いうほなすも有りけり德兵衛は安南あなんに來りてより二箇月計りなれ共元來少し漢學かんがくを學まなび文事ぶんじを好このむるに従り餘暇あま此地の儒士詩人じゆししじんなどにも交際かうさいし就中すなはち北京より此に來りて寓居くうきよせる沈玉芝しんぎふしと云る文人德兵衛を愛し日本人にっぽんじんは珍めづしと賞しょうし德兵衛も玉芝を敬うやみ閑暇かんげの時とき其居そのゐを訊問しんもんけるが今日も其家そのうちに行き賀辭がじを述て訪問ほうもん爲ければ玉芝ぎよくし怡悅いよくて正廳せいだうに請まをじて安南の官人と同坐どうざおて燂鍋せうかくを饗應きやうおう互あひひに談話だんわを爲しける（ソツソノ）とは支那の食卓料理にて小菜八鉢せうさいはつぱつを燂鍋せうかくにそへ饗あ如く燂鍋せうかくは「ロテウメン」と云ひ絲豆しとうめしに鳥獸ちうじゆの肉にくふかのひ（そこ）我國に於て年始の客きやくに組重くみじゆう肴さかな汲物くみものなどおて酒宴しゆゑんをなすれ野菜など入て煮しものなり又小菜は酒の肴さかなゆる（あり）角倉船と安南港あなんこうに碇泊ていぱくなす

こと三箇月にして二月の月上旬此地を去りて暹羅國へと船を向けたり

○德兵衛暹羅の釋迦大像を見る條並縮甸國王行幸の事

後印度暹羅國と安南縮甸の隣國りんこくとして此地を豐饒ゆたかなる事安南あなんに劣おとらず貿易ぼうえきをなす處ところあるを角倉かくくらの商船しやうせんを安南港あなんこうを二月上旬に抜錨えつこうして東浦寨とうぼざいに着港ちやくかうし此に一句餘り在て暹羅の港に入船せんせり當港たうかうは於ては日本製客協議あまうぎを爲して商社しやうしゃを設たれば其社そのしゃに商品しやうひんを上げ高松清兵衛德兵衛京都大坂近江の商人も會社かいしゃに滯留たいりゆうして貿易ぼうえきを爲す此會社このかいしゃには從前の簿記者ぼけしやくしやく雇入も有れを德兵衛安南在留ざいりゆうの際ときと書記計算等も少く依て閑暇かんげの日も多おほく然れば清兵衛又と乗客じやくきやくの估客かきやく楫取長水主等しやくとりながみづなと同行し國內の名勝地めいしやうちを遊觀ゆうくわんせり一日德兵衛ハ乗客丁子屋幸介長崎京屋ながさききやの書記半治郎と三名士人さんめいしじんを誘導ゆうどうをさせ首府しよふの曼谷まんこくに至るに湄南めいなんの大河は廣宏ひろくとして幾いくど海灣かいわんの如く萬國の商船しやうせん此に碇泊ていぱくせる者多おほく是に於て德兵衛前印度てんごの僧俗そうぶく及び緬甸人びんてんじん老嫗らうおん人巫來由まわいの老少西洋各地の人をも見て土人どじんハ其邦國そのくに郷邑きやうい産地さんちの事を聞ぬ又湄南の水みづ上うへと筏いかだの上に家を建て住居すませると他邦たほうにハ非ひされを僉あむむ徒た復ふて之これを看みるハ土人の卑賤ひせん者其水上の家いへより出陸地しゆくちハ來れる容ようを見れば頭髮かみづつを半か剃そりて面部おもとも陋いやく唇くちびるも黒くろく（是と）「ピンロウ」を好このむかむ

(ゆゑ) 半身裸体にて跣足で歩めり又大象を牛馬の如く使ひ土人のお乗て市街を往返し或
 ひと物貨を背お積て運むし支那人の寓する者頗る多く老嫗人と文身にて脊手足に種々
 の畫を彫りけたり扱王宮の結構と見上べた宮殿に金銀珠玉を以て飾り門牆等も美を盡し壯
 麗あるに僉賞讀せり又巨大なる寺院多く雲を凌ぐの尖塔許多堂内には大佛像を安置せり就
 中く上古お須達と云る長者が卜居せし地の迹に建たる大伽藍と當國の第一等の壯觀にて堂
 の大さ六里餘にして(此一里は支那に用る六丁の一里)其簷下には二條の阡陌有り是に土人
 居宅を造りて卜し柱梁り巨材を以て作り堂中よ立像座像臥像の釋迦佛を安す其大さ言語お
 竭し難く小指の高さも二丈に近しと此他の大さ之に准ず猶諸菩薩羅漢等の像も日本京都南
 都の盧舍那佛を立像に爲したる如之何れも目を驚愕かすの物にて其作巧みよして尋常に優
 れりとぞ徳兵衛等は豫て此大佛像の事は聞つれ共半信半疑ありけるが現に實物を見て肝を
 消ぬ而して徳兵衛暹羅に月を累ねて在留せる中此地よ卜せる支那人に知己多くでき俱お遊
 歩せる事も數回ありて緬甸の地に至りて首府及び伊犁瓦地の大河を映り又山林をも見る
 に頗る大樹多く土人の男女大概裸体にて往還せり爰に異風成る衣裝を着し白き大象の脊



暹羅 大像の釋迦坐像

ふ騎扈従多く具して來る有り徳兵衛之を見て不審く思ひ同伴せる支那人梅溪に對ひ彼は何人ぞと問ふ梅溪之を聽と云へ共黙して答へず徳兵衛重ねて問んと爲す時友の支那人半嶺徳兵衛の袖ひき耳に口を寄せ小聲にて告るに是國王の行幸あり然れど當國も國王の名を呼び或ひは書する者有らむ其者を捕へて死刑に處せり其制禁嚴よして殘酷なり然ば梅溪も之を怖れて君に應答せざむ徳兵衛詰して半嶺梅溪と共に巷上にイ干居ると頓て前を國王通り過ぬ之を土人拜するに裸躰あて掌を合せ三拜なす容恰かき佛像拜ひに等し此國虎豹犀象野牛多く猿猴は頗ふる許多にて山林に群り鸚鵡は樹枝或ひと人家の屋根にゐるまど日本の鳥の如く孔雀は黃雞の如く飼家ねはかりしと又巫來由の地に行き前印度(天竺)の諸洲彼世界第一の喜馬拉山釋氏の舊迹をも見巡りたり

○徳川家光上洛の條並大坂堺の地子銀を免す事

爰に寛永十一年の秋徳川(三代)家光公上洛に付て同年三月宮城越前守あ東海道巡見を命す越前守驛路を巡視して圖を作り上る家光公之を一覽有り老中は道中奉行に驛路の諸般を命ぜらる(東海道路傍の土堤並松を植)而して六月廿日家光公江戸城發駕大老職酒井雅樂頭忠

世留主中の警衛す紀伊尾張水府の三家を始め諸侯供奉して東海道を上り七月十八日に入京あり其行列美を盡し人目を驚おしむ此時京都大坂南都お往昔より卜居せる大厦の町人等又神官大寺の住僧畿内の豪農夫或ひと由緒有る郷土町人等も洛東日之岡峠に行て入洛を迎へり幕府は二條の城に入り供奉の諸侯は洛中洛外に豫て設けたる下陣よ着す而して参内して京都に滞留あり公卿及び在京の諸侯幕吏登城櫓の齒を挽が如く城外と扈徒群集す前に入京の際出迎へ成またる神官僧侶郷土農夫舊家の町人等も獻品を携へ伺候を爲せり斯て閏七月の中旬二條城に於て五万石以上の城主を召て御朱印を下され京都の町人へ上洛土産として銀五千貫目を賜ふ町人等之を頂戴して大に怡々市中賑とへり同年八月幕府大坂へ下向二條城を發駕有て行粧壯麗あて列正しく伏水より乗船して淀川を下る兩岸の陸警衛嚴重あり時お大坂北組惣年寄を勤むる天野屋利兵衛南組の惣年寄安井九兵衛天満組の惣年寄中村左近右衛門等大坂惣代(惣年寄に屬す)手代を稱す町年寄を召具して今市村川端お出迎へり幕府大坂へ着船入城後ち大坂惣年寄中より祝儀として二斗入の樽三荷鯉節二百本入三荷を城中厨所へ献す之によりて大坂三郷惣年寄を城中へ召し葵の紋の時服を賜ふ其後ち老中幕府の命をうけ

大坂堺の惣年寄を殘らず召出し老中の曰く今度將軍機御上洛に付於大坂堺の町中へ御土産として地子銀永代御免成し下さるゝ從て兩所惣年寄町々年寄並びに頭立し町人二人宛高麗橋筋御城角矢倉前芝坐へ相揃ひ申べし其節金の麿角矢倉より出し候とい是則ち地子銀御赦免の上意有し成れば皆々當日麻上下を著し罷り出で御仁惠の有難事お心得て御請を申べしお述る惣年寄等畏まりて退出し扱地子銀赦免の日に至れを大坂堺の惣年寄町年寄町々に於て頭立町人共御城の芝坐へ未明より相詰めければ辰の刻頃角矢倉より上意の金の麿と出せを各人異口同音に有難しと高聲に述べ平伏して禮をつくし販宅せり(此地子銀赦免の厚恩を永代忘れざる様とて大坂惣年寄協議して二六時中に撞く) 同月幕府は大坂を發して江府へ歸られたり

○御朱印船航海廢止の條

扱角倉の商船と寛永十一年の冬より前印度(天竺)の地に碇泊し德兵衛は釋迦舊迹をを見物せし時から日本に於て徳川幕府外國通商の朱印船航海廢止の旨長崎府尹へ台命あり之に依寛永十二年の春長崎より府尹急使を外國へ出し在留せる船船頼よ販國爲べしと嚴重お沙汰

す從て角倉の商船も四月上旬前印度の地を發船して八月下流に長崎に着し航海鑑札と官へ没収と成り高松清兵衛德兵衛作右衛門甚三郎は水主と共に京都に販り乗客の各人は思くよ販國せよ朱印船航海廢止と成てより德兵衛は以前の如く角倉に奉仕を爲けれ共清兵衛と不用人と成角倉より數年功勞の賞として資本金を與へられしかを清兵衛と有難く之を受て厚謝なし生國播磨の産物ある赤穂鹽龍野醬油を京都へ取らせ販賣を成ぬ又作右衛門甚三郎にも主家より相當の金を與へられ此二人と販國して船乗を業とせり德兵衛は他の甲幹とは異おして少し文學も有れを彼主の好の赤烏帽子と云る如く主入與一郎の寵愛を蒙りしが航海して支那の文人とも交際おしける故航海の以前とは學才も益けるから與一郎彌々愛して側近く召使ひ來客有る時と攝待令むるを他の甲幹と羨やみ或ひは憎み如何して德兵衛に過ち有ん事を待ち支配人の重右衛門に德兵衛を説せる者も有ぬ爰お角倉の後室貞善(了以の母之)の召使へる侍婢お環と云へるあり是は同々京都の鑓の下お卜居せる醫師岩井了庵の處女よて年齡十八才と成り容貌優美心も悪からず克貞善に仕へけれを愛しみて使はれける德兵衛何暇此環と密々お契りしが始めの程と誰も知らざりしが契り累なるよ從が二人と

目面に色顯はれ毎日に徳兵衛主人與一郎の傍近く居るに環もまた貞善の要をなすも與一郎が便房の邊りを往來し古き川柳点の狂句に言る如く「其手代其家婢白日と言いはず」と徳兵衛他の侍婢もと言もかはし時としては戯れたる言も發しければ却つて環に無人望なせり然れど包み隠すほど知れ易き者なれど徳兵衛と環が密會せるを知る者の有て豫て徳兵衛を憎み居る甲幹も告げれど雀踊して怡悦び其甲幹等嵩にかさを増て支配人に語りたり然れど重右衛門は年庚の人と云ひ思慮の深き者なれど容易よ之を口外せど徳兵衛が舉動に注目て居れり案下休題播磨高砂赤穂屋には去る寛永十年の五月徳兵衛の實母阿磯と急症の病にて没し家父徳右衛門年齡既ふ六十と成ぬるに同年の秋七月に同國飾間津より後妻を娶りたり此後妻阿濱は年四十に満す甫て十三才と成れる阿波と云ふ少女を伴ひて來れり之徳兵衛外國在留中の事に有れば今年歸國せる迄是を知らず然れど實家といへ共疎遠の中とは成りぬ徳右衛門と年老ぬれ共未だ船乗の業は止す高砂より大坂へ通へる船の船長と成り數々廻漕を爲すも今年の春二月の下旬明石古海門の沖合にて難風に遇ひ破船して積荷を失なひ其身は辛ふきて陸地に泳ぎ着命は全ふすと雖も此災害より船の修繕失亡の荷物の辨償等には

失費多く資本も減たるに後妻阿濱の假子の少女三月の頃より難病發り是が醫療に入費を増し夏候ふ至りて家も衰るんども之依て徳右衛門は京都も來り高松清兵衛の宅を訪ひ角倉より徳兵衛を呼び金索の事を談するも清兵衛も氣毒も思ひ徳兵衛と角倉に行き支配人重右衛門に依頼して金二拾兩を借受て徳右衛門も貸與へしかを大悦して歸國せり

○徳兵衛了庵が處女環と深契る條

斯て寛永十二年も暮して十三年丙子の初春とは成ぬ爰に正月の中旬徳川家の儒臣式部卿林羅山公用の事有りて京都に來り角倉與一郎立之とと舊友にして藤原惺窩先生の節にて特に親中あれを訊問せられ一は與一郎と大悦して正廳へ請玄一別以來の挨拶了つて厚く饗應し談話に時を移されしとぞ
 (角倉與一郎立之の惺窩先生の門人にて素庵と) 此時與一郎甲幹徳兵衛に拜謁させ支那印度の景況の事なを語らせぬ斯く寵偶の徳兵衛なりしが同じ頃侍婢環と私に通ずる事與一郎が耳に入ると家風を乱せるを惡まれ發憤て徳兵衛を大に呵責願に支配人重右衛門を呼び徳兵衛を高松清兵衛方へ引取す可いと命せらる重右衛門と返す詞も無く徳兵衛を阿り清兵衛方へ渡りたり又侍婢の環を其慈母と呼寄せられて環が不体裁

を重右衛門より言聞せて伴ひ歸らせたり環は朋輩に耻のしく思へれを涙ながらに角倉を慈母と共に立去ぬ而して後ら徳兵衛は叔父高松清兵衛が宅に食客と成り清兵衛と支配人の重右衛門は倚頼して徳兵衛の歸參を主人は只管願ふと雖も角倉の腹は私情を通ずるの事至て嚴かに禁しひる成れを些少も歎くを用ゐなく清兵衛は太だ是を困りけるが徳兵衛と強て角倉を離れしを困難には思はず日々叔父の家の商業を介し意衷に獨立して一業を發めんと欲せり又環は家歸て後ら稍暫時の程奉仕にも出ざるに何なる縁して有けるか徳兵衛が事を忘れかね頻り慕ひて徳兵衛に逢ひ徳兵衛も環を愛で他目を忍びて私かに會ひ互ひに無別中とはなれり然るも環が家父の了庵露知らずして處女環も早年ごろ成と良き婿を迎へ家を續さんとやと知己朋友とに依頼を成ぬ茲に京都の一條邊に有馬某と云ふ橋井あり門人も多し有りける中上足ある稻野竹藏とて攝北能勢郡より來る有り竹藏平日に了庵の宅に來れ心徳も能此を知れり了庵一日妻よ對ひ我家男子有らざれば何れ長女の環を婿を定め配偶させて家を續さんに商人工人と好まず余知己に紹介を頼みおさしかと熟々と思ふに時々訊ひ來れる彼稻野氏は醫術も熟し年齢も環と相當と思へる過老日有馬氏へ行し時先生お粗語りて聞くも其宜しかる可し渠と次男にて家を續身にも非ず徳も年相應より行なひ侍ふと云玉へを年は何才も成らるゝ歟と問へを甫て二十五才に成ぬと了庵良死夫婦は非せやと云るを妻は聞て應へるみ妾も豫て其と思ひつゝ其彼稻野氏は些酒痴悪く酔たる時は甚だ短氣と成らるゝ由はのかか聞侍る酒痴の悪き良人を持つ時々困難成こと有と妾聞ぬと云を聞て了庵笑ひ酒痴悪しとて酒を喫通す者にも非せ又何人にせわれ人に七痴と云へる言わりて痴の無き者無し彼人と知如く至つて柔和よて才も有れを了庵は賛成なせ其妻は不満なれを處女は十九才彼人と廿五才にて二人共に厄年あり相性も如何なと云て決せを處女環は双尊が何の膝をよせて密々と談話を若や縁談の事にも有んかと襖の側に身をよせて聞つるに案に違ふす其ことにて特に嫌へる竹藏と家父が頻りに賛成して婿に爲んどの事なれば環は憤たどへ良人故に落魄して乞巧と成るとも彼人の様を男よ添じと嗔其背ひそのに徳兵衛に會ひ妾家お在ければ双尊が婿を迎へんと云へれば早く何れの地への件をひ玉へ如何成僻邑山家に住も又愁氣ことの有るをも妾と些しも厭とせしと頻り苛ちて促と徳兵衛も困りしが稍思惟して環に云へるに然らば明夜來られよ余も京地を脱走せん準備を爲すべしとて

二人と其背別れたり是三月の中浣の事なりとぞ

○幕府寛永通寶の新銭を鑄る條並徳兵衛環京都脱走事

徳川幕府家光公日本新銭を鑄造して通用令んと欲し老中土井大炊頭酒井讚岐守松平伊豆守阿部豊後守堀田加賀守等と評議あり日を経て其事決談成りて十三年の春江戸江州坂本の両所に新銭鑄造場を作り寛永通寶の文字を据たる一文通用の銅貨を鑄造せしむ是方今に遺れる一厘銅銭なり而して十三年六月朔日より内國一般に通用の旨を布告せらる日本に於て此新銭を鑄の以前は如何成銭を通用せしと問ふに大古より銀錢銅錢有りて既に紀元一千三百六十八年元明帝の御宇武蔵國より和銅を献す之に依て年號を和銅と改元有り而して和銅開珍の銅銭を鑄さしむ其後一千四百十七年天平寶字紀元開基勝寶の金錢を鑄て一千四百二十年天平寶字四年に太平元寶の銀錢萬年通寶の銅銭を鑄る又一千四百廿五年天平神護紀元に神功開寶の銭を鑄一千四百九十五年承和二年に承和昌寶の銭を鑄其後十四年を経て嘉祥元年長平永寶銭を鑄る其他二千二百七十五年元和元年に至る迄に長年大寶和開通寶問元通寶和銅男珍富壽神寶饒益神寶貞觀永寶寛平大寶延壽通寶隆平永寶乾

元大寶文祿通寶慶長通寶元和通寶等の銭ありしなり又永樂通寶の銭は紀元二千六十三
年應永の十年に支那國の船此銭を積み東海に漂着せしを奪ひ取て通貨に用ひ凡そ二百年の
餘を日本の貨とせしを慶長の十一年に通用を停止せり談話易つて徳兵衛と環を伴ひ京都を
脱走せんと決心し角倉に在ける日貯はへし金を懐中し衣類を風呂敷に包み日の暮るを待
けるが清兵衛夫婦之を知らず其背清兵衛徳兵衛に謂る今日大坂より醬油五駄着せる筈
あるに今に來らず若哉高瀬舟の水揚場に捨おきて非ざるか一走り行て見て來られよ着し有
れば直小運をせ玉はれ余行て見んと存ひ居しが他至急の要出來たれを今より五條の龜山
屋まで行へし早々頼むと云けれ徳兵衛是を幸ひと心に怡悦び頼に諾せば清兵衛急ぎ外面
へ出ぬ徳兵衛と怡憎々々して衣類の包を竊かに持出し豫て環と示し合せる三條の橋詰に至
れを環も包みを両手に抱へて干待り徳兵衛環を詞をかこせ包を一ふして脊に負ひ大坂へ
下らんと高瀬川の舟に打れり伏水お出て淀舟に乗かへ大坂さして下りたり

○徳兵衛環大坂に卜居して婚禮を成す條

戀は思案外と言ひ天稟篤實なる徳兵衛も環少女の色に惑ひ叔父高松清兵衛に議を欠きて京

都を脱走して大坂に當時卜居せる以前角倉船の水主長なりし甚三郎が宅におち着其上へ奈
 何共爲と八軒家お着すと直ぐ食事を爲して安治川に至り其宅を尋ぬるに安治川町と南北に
 有ると小家の事あれば容易に捜し當らず春の日の永きも早正午頃も成ぬれば旅亭に泊りて
 明日又尋んと土佐堀の河岸に來り何れの旅舎お宿らんと那方這方と徘徊すと時角倉の徳兵
 衛ぬし何處へ行き玉ふと云ふ者あり徳兵衛はつと驚愕ながら願回ば別人あらせ前年航海
 中に知己成し彼天王寺屋武右衛門なれと徳兵衛は大に悦び互一別以來の會釋なし武
 右衛門と様子を問ふと徳兵衛は「干午らに大概を語れ」と武右衛門元來俠氣の性質の者成れ
 ば余方へ來らると將來の事も寛々示談し余引請て良き計ひ御周旋申べしと云るを聞て徳
 兵衛も環も共に只管に宜しく頼み侍ふと云武右衛門と同行して天王寺屋が宅に行ぬ此武右
 衛門は客歲外國通商の停止後直ち長崎積の荷物取捌の問丸と成り且長崎估客の旅舎をも
 爲ば居宅も廣く客室も多く設けたり扱徳兵衛環武右衛門の宅に至れば妻の阿花は厨所に
 居て徳兵衛と互に會釋を終るに環は耻るや座の側らに立心徳兵衛と立て招く耻ながら中
 門より内に入れば武右衛門が妻環を見て驚愕是はと云て稍言なし環も阿花を見て愕然貌眞

赤にして耻ぢ退ぞく事も出來ず困り居る此有様お徳兵衛も武右衛門も如何成こと歎知れぬ
 共俱に呆れて黙したの稍して阿花環に對ひ是は珍らし環棟此方へ來り玉ひねと坐を設けて
 請せんとす環も阿花様久しく逢まひらせせと互ひ無恙を悦喜て會釋を濃かあるを武右衛
 門と傍らより阿花此御方を知れるはと問へを阿花と良人に對ひ此環さんは縁で貴君に物語
 れる岩井了庵様の娘御なり妾とと年齢と少しと雖ども實家に在し時の親しき友に侍るなり
 喃環様習字縫針の藝も一つお師匠様で有ましたなど云に環も應へを爲ば徳兵衛彌々呆れけ
 る武右衛門と徳兵衛を小室に伴ひ始終を具さに聞とりて阿花とも商儀かし徳兵衛環を宅に
 止め其背武右衛門乗船して京都に至り高松清兵衛夫婦に面會して事を談ぶ又阿花の舎兄の
 二文字屋善助に徳兵衛環の事を語り武右衛門善助と同伴して岩井に赴む始終を述べ武右
 衛門環と徳兵衛を配偶致させ度由を示談あすと雖も了庵處女の脱走を怒つて取敢ざれば其
 日と武右衛門善助の宅へ歸り一週間計りも在京りて高松岩井を承諾させ大坂へ立歸りて委
 曲を徳兵衛環阿花お告げれば徳兵衛も環を大に喜悦び天王寺屋夫婦お厚く謝しける而して
 四月の上旬高松清兵衛岩井了庵も大坂お來り天王寺屋に於て協議を爲し傍の小家を借うけ

徳兵衛環を下居させ婚姻の式をも行ひて岩井高松は上京せり

○肥前島原賊徒暴動の條

赤穂屋徳兵衛環と圖らずも天王寺屋武右衛門が周旋により宿心を達し居處も設けて夫婦睦
 敷暮しぬるの未だ産業も有らざれを今度の恩を報せん爲めとて夫婦毎日天王寺屋より行
 徳兵衛と店頭に在りて武右衛門が業を助け簿記荷物の輸出入の點見或ひと來客の饗應など
 を爲し妻の環は阿花が爲す庖厨の割烹裁縫の業滞留の客の給仕等家婢の如く手助けを爲し
 けれど武右衛門夫婦と大ひに悦喜武右衛門徳兵衛を見ること阿叔の如く阿花環を愛するよ
 ど女弟お等しく最睦しく暮しけるに光陰に關守は無く何暇二年の月日を過し寛永十五年寅
 の五月環をやすく一男兒を分娩小字を徳太郎と名づけたり案下休題客歲の冬十月より肥
 前國島原の住民耶蘇宗の信徒蜂起を爲し猛勢なりければ九州の諸侯幕府へ直ちお注進し細
 川黒田鍋島有馬立花の面々士卒を率めて島原に出張して賊徒を征る又江府よりは板倉内膳
 正石谷重藏を陣代として出馬鬪戰數々なりぬ然れど賊將芦塚天草大矢野千地輪駒木根等勇
 を振ふて瘡ます落城なすの色無一依て幕府板倉重昌と無功の者と見かした松平伊豆守信綱を



後詰の大將とし水野戸田を副て肥前に發向せしむ板倉内膳正之を聞て口惜く思ひ必死の戦ひを爲んと決心して翌十五年の正月元日奮戰討死す時に重昌享年五十一松平信綱島原着到諸將と軍議し長崎に在留せる荷蘭人を召寄命じて賊城へ大砲を放たしめ諸軍奮激して攻る賊大に狼狽して敗す而して二月に至る時鍋島勝茂其子勝重直澄等勇を振ふて賊城に乘入諸軍此勢ひを見て我劣と進み賊兵を斬て廻り本丸を圍み賊將芦塚忠右衛門天草四郎犬矢野作左衛門千地輪五郎左衛門駒木根八兵衛等を誅伐し將賊兵四万餘を討取り是に於て鎮定せり惟時寛永十五年二月廿八日なりとぞ其後殘黨搜索し四月に至りて松平信綱始め水野戸田と江府に凱陣九州の諸侯も悉皆く士卒を具して本國へ凱旋す談話易つて播州高砂の赤穂屋には徳右衛門が後妻阿濱年既に四十超甫て十八才と成ぬ處女阿波も有ぬるふ今年の芳節より水主延藏と云ふ壯年なる者と姦通し四月に至りて徳右衛門之を認め竟お紛紜と成りて五月の月上旬に徳右衛門阿濱を離縁す依て阿濱と處女阿波をつれて節間津へ歸れり徳右衛門の老年に及びて獨身と成り且家事を勉むる婦人非ざれば大に困りて徳兵衛夫婦も高砂に移住せと云れ共徳兵衛之を好まざる上へ今は天王寺屋に無て成らぬ者あれと武右衛門も

徳兵衛を惜み離しかね従て高砂の家を親戚の者お譲らせ武右衛門と徳右衛門を大坂に招いて徳兵衛と同居せしむ然るに環との中睦まじからねば徳兵衛武右衛門と參定なして徳右衛門の隠居家を借うけて別に住せり然るに今年の秋の初より徳右衛門と病て八月の月上旬に六十七才にて没したり徳兵衛は大に悲み葬送吊祭を懇切に爲しける

○徳兵衛長崎に於て難風お偶ふ條並沈玉芝徳兵衛の危難を救ふ事

寛永十六年卯の三月以前長崎京屋船の書記者たりし永井半左衛門(初名半治郎と云ひ徳兵衛航海中親しく成したる友人)上坂して天王寺屋へ來り武右衛門徳兵衛等と面會して前年航海中の事ども對話爲し永井と天王寺屋おて滞留せり而して同年六月半左衛門と要用竟り歸國の際徳兵衛を同船爲んど云徳兵衛此頃己が擔當せる天王寺屋が諸般の要を大半甲幹等に致させし戒れば其者に託して武右衛門に環徳太郎が事を頼れと永井と俱に長崎お至りぬ茲に八月下旬の事なるに徳兵衛小舟に打乗り長崎港を出て三ツ石と云る地迄至り遊び居しが其日の午后卒然お暴風吹出し海上に巨波發り徳兵衛櫓をよぎ陸地に舟を寄んと爲れ共舟と波に乘て遙に上にあがり又水中に下りて沈むが如く然れと徳兵衛は幼少より海邊を遊び船を進退さす事妙

を得たれを恐れず櫓をよぎ居る中楫は折れ櫓綱もされ暴風まどく烈しく成り舟は木葉の風に散が如くよて太平洋に流され數日漂ひ竟る支那海まで來りぬ德兵衛此に至りて氣力も大に衰へ茫然と夢の心地し陸地遠く非ぞと雖も何の地とも分ち難く身体四肢も瘵たる如く今に死べきかと思へる時何人か耳の口よせ高聲に呼はれ共何をか言共辨別爲難く漸して德兵衛氏氣を慥にせよと云るに小聲にて應へ四邊を見るに何暇にか陸地に上りし歟舟よは非ずして支那風の家にて睡床の上に臥たり是は知りたれ共何國の地にて誰の助けしとは未だ分明に知れず頻りに誰か藥湯を喫ましむ一晝夜も經しと思へる時漸く四邊も鮮明に見へ傍よ訊ひ來れる人の容貌も見へ熟見れを安南にて知己と成りし沈王芝なれと德兵衛安堵して大悦し玉芝に厚く謝せんと思へ共言語は未だ整のはず德兵衛面お笑て掌を合せ玉芝を拜せし玉芝と懇切に詞を發して德兵衛氏如何ぞ此お件なむしより今日に至て速四日お成れば些は快からん未だ食物を欲くは無や能く危難を免られたり僕家にて自珍せられよと云ふと耳に通ずれ共應は出來ざれば只何事も掌を合せて拜みける斯て其後ち日を累ぬるに隨ひ漸々氣力勢ひまし言語も通ずる様に成りぬれと玉芝に厚恩を謝し長崎沖にて難風に偶

しより始終を語れば玉芝聞て驚怖瓊州島の海にて危ふさを救ひ種々して安南につれ歸り醫療を加へし等云へる聞て德兵衛太はた怡々して君は僕命の親なりと謂りしとぞ (是日本寛の九月上旬) 扱日本長崎永井半左衛門が宅にと赤穂屋德兵衛一人小舟に乗て海上へ遊に出たる日暴風吹き宅お歸らざれを如何せし一の死生の程も覺束なしと風やみて後ち搜索すると雖も更に行衛も分明ならず急ぎ此事を大坂に報知んと書狀に具さむ認め急便を以て天王寺屋方へ差出したたり

○武右衛門義心德德太郎を養育と條

赤穂屋德兵衛と沈王芝が宅に逗留して養生を爲す元來病疾と云にと非ず漂流中飢渴せしと心勞よの大病の如くに成りし故二週間も過す中身体健康に成り食物も進みて沈王芝が家族如く爲して同居なし暹羅の梅溪(前友)半嶺(同)李揚江等の宅に訪問し東蒲察巫來由及び後印度の地を那方這方と遊歴して今年は此に暮したり(寛永十)話易つて日本大坂天王寺屋には十五年の冬十一月に長崎永井半左衛門より急便の信書着しければ武右衛門と環に讀み聞せんと懐ひ阿花と共に環を近附信書の封をおし切て聲高く讀み八月の季德兵衛海路に一人

遊び行衛知れざるの文を聞て環は他目も耻ず喉と哭き武右衛門阿花も是と大變眉を蹙めて愕然する中環は身を打伏て哭入氣をうしきへと阿花之驚き藥を與へ耳を口よせ呼ければ稍して環は呼吸通ひ又さめくと哭泣せし此騒ぎ大方成らず阿花は環を後室に臥し醫師を迎へて醫藥を進め未だ當歳の徳太郎に乳を貰ひ吞しむるや京都高松岩井へも徳兵衛の事を報告するも天王寺屋夫婦の忙はしき時止宿の旅客追々來り且長崎へ出船ありて荷物の積入又徳兵衛が安否を問はせん爲に周徒者を出途致さずにて上を下へとかへしける此後環は日々哭くらし良人徳兵衛が死生を知れされ共のや婦に成し心地よて徳太郎を見て良人と思ひ真心正しく成しけるが早晩年は暮れ及べ共徳兵衛が便りと無く武右衛門夫婦は信義を竭して環を養ふへと環は心だより無く思へば武右衛門夫婦に謂く妾何の役に足らずして斯貴君がたの御世話と成ること耐恐ろしく思ひ侍るにより良人の歸り侍ふまで京都の家父の家に歸り度よし云しかと武右衛門の云るも其は如何とも心任せに爲玉へ然ながら余に於てと徳兵衛ぬしに連添るゝ其方成を何時迄も家にとりめ萬一徳兵衛ぬしに凶事もあらば其子を育てゝ家を續せん存心なりと云るに環も強て京都へ歸らんと云かね阿花も共に

止めければ環と更に其身徳太郎がことを一向夫婦に依頼して天王寺屋が情けを受けて同居せ

○徳兵衛天竺錫蘭島へ赴く條並徳兵衛日本へ歸國の事

扱徳兵衛は其翌年(日本寛永十)の春一月安南の沈玉芝の宅を暇乞ひして縮旬に行き支那の僧瓊山の扈從と成りて錫蘭に航海し前年見しも見ざるも釋迦の舊迹寺院を尋ね或と雪山靈鷲山に登り此に在ること半年餘り僧瓊山より別れ「ロマンタル」に航し「メトラス」に至りて此に滞在せしが一日近傍の家に夫を喪したる妻あり其年若く二十歳餘りとも見ゆ此婦人悲歎にたへせ二歳許りの兒を抱き夫の死屍を焼烈火の中に飛入りて焚死せり之を見て徳兵衛の驚愕さしが土人と合掌して佛名を唱へ誰か止むる者なし徳兵衛此陋習を知らざれば甚だ不審に思ひ之を土人へ問ふ一般に爲すことにて或と「ゲンザス」の大河へ身を投げて鱒に食とるゝ者も有り或と靈車のひかれて死す者も有り云へるを聞て徳兵衛は肝をけしたりと又此地より「ホンペー」へ行きて「セントラル、フロヒ、シセス」にも居り猶各地に回り一年餘を歴て又縮旬に歸り而して荷蘭の商船の便を得て寛永十八年の春に長崎へ歸れり徳兵衛着岸爲と

直ちに府尹廳より有司來りて捕縛して廳へ拘引す是外國へ航海し或ひハ漂流せる者と雖も歸國爲ば召捕へて檻倉に入れ得と吟味の上へ無罪あれと産國を送ること徳川幕府の制度なるが上に客年の六月呂宋の黒船一艘長崎港へ漂着し前年より嚴禁と成る耶蘇宗門を再び日本に弘めんと爲の勢ひあり之に依りて其徒六十人を誅す此時柄なるを以て徳兵衛は獄舎に繋れ日々鞫問せらる徳兵衛難風に偶たる後に安南に止まり前印度に至り再び後印度へ歸りて荷蘭商船の便にて歸國せし事を少も包まず明白に露吐爲すと雖も容易に無罪放免と成らず長崎府尹一順鞫問の上へ江府老中へ伺はれ老中評議の上罪科を達せられ而して裁決なる者なれと其間數月を経り漸やくに同年の秋の半に長崎に於て宥罪出獄し大坂へ護送と成り大坂府尹より斐徳天王寺屋武右衛門を召れ徳兵衛を引渡され一は同年の冬十月なりしとぞ環と四年歴にて良人に偶ひ怡悦と限りなく徳兵衛を徳太郎が無事に生立しを欣悦武右衛門阿花も誕生りたる人の如く云て怡悦々々頃頃京都長崎へ報知の書簡を出し高松清兵衛若井了庵も書翰の達すや否哉下坂して徳兵衛に面會して歸宅を悦び徳兵衛四五日間各人と物語りの間斷も無りし程なりとぞ又徳兵衛武右衛門夫婦に四年間環が厄介と成た

るを厚く謝して自宅に移りしが活達の徳兵衛を久しく囚獄と成し故疾病發して其翌年の正月お全快し其年は再び天王寺屋に通勤して恩を謝したり

○徳兵衛來船品商業を初る條並倫賊妖術を以て人を惱ます事
 愛お寛永十九年の金商長崎永井半左衛門小岸久之亟蜂谷五郎兵衛の三名上坂して天王寺屋武右衛門が宅來り武右衛門徳兵衛に面會して此に滯留す此三名の士は御朱印船有し時の書記者よて方今と幕府貿易輸出品の關係なす人々よて蜂谷小岸は徳兵衛が叔父高松清兵衛とと特別に親み深ければ三士在留中京都に上り高松清兵衛に對面を成し徳兵衛に支那紅毛の來船品の商業を致させん事を談じければ徳兵衛も徳兵衛に何か一商業を初めさせんと武右衛門始め知己朋友の各人とも示談せる時なれと大よ其懇切を喜悅謝して其後大坂へ同行去て清兵衛は武右衛門徳兵衛と商議爲して其商法を初めんと同年の九月お決定して永井小岸蜂谷の三士と十月に長崎へ發途して來船品の荷物を大坂に運輸して翌る年寛永二十年の春より赤穂屋徳兵衛は支那來船の布帛細貨磁器木器財の渡紙の類荷蘭の毛織布帛諸器物などの開業なし甲幹一名小僕二名を召使へり然るに開店なすより日々に繁榮して三年を経

さる中に資金も殖へ家族も増たり將妻の環も今年一女兒を分焼て小宇を阿富と名づけたる
 従是前々十八年の頃成るが長崎港に来れる一の海賊あり其的日本人にて何時の頃外國に至
 りしにや知れされ也妖術をつらひ印度支那の地を徘徊して物貨を掠奪し或ひと幼少の者を
 偷み奴隷と賣り人を殺害なすこと數々なりしと是の巨魁を建酷と呼ぶ其屬下の賊數十名あ
 り一日偷兒建酷船を海中に碇泊屬下四五名を具して小舟に打乗り大浦の濱より上陸し其地
 の人家に壓入財寶を掠奪し丸山を徘徊し長崎の市街より來り大度忍び入て金銀衣服を掠め
 或ひと小家に眉目好少女を認め奪ひ去て海船を送り之を己が妾と爲し或ひは遊女に賣り
 其暴行實に惡べきの所爲なり此頃長崎の一富人お彼杵某と云あり此家處女藤枝と云るは年
 二八にして容貌美麗く沈魚落雁閉月羞花と賞すべきの婦人あて深窓可愛せられ行歩連綿あ
 り然るも藤枝其隣家へ大坂より來りて滞留せる幸二郎と云へる壯さ郎も戀慕し侍婢の紹介
 よて密に藤枝幸二郎に會ひぬ其後ち又密會を約束し其宵闇の戸を細く開きて幸二郎が忍び
 來るを待ぬ然るも彼偷兒建酷藤枝が慈母と共に他より行き家に歸るを認め奪ひ去らんと企て
 其宵闇に彼杵の宅の宵門の扉を越忍び入て藤枝の便房を探り近づき見るに燈火も點さず



偷賊妖術を
 以て傳
 我遊女
 立去る
 暮

眞暗なれば是の思ひ違しかと建酷は立去らんと爲に藤枝は之を戀郎の忍びしと思ひ戸を靜かふ開き待たぬれよや建酷を確と両手で抱へしかば建酷と藤枝と思はず振拂ふて伐つけれ心無慙や藤枝と肩を深く伐れて喉と叫倒れたり建酷は見咎められど堀を乗こし逃にける藤枝が叫びし聲を聴つけ全家者目を覺し何ごと成らんと馳來れ藤枝は便房の椽前に肩より胸へかけ伐られて床に成り倒れば各人驚愕何者の所爲やと那方這方と搜索なすに殺害者の有す双尊と寵愛の處女の死を深く歎き全家の男女誰か惜みて泣かざる無く其騒ぎ大方あらせ夜の明るを待わびて府尹廳に訴ふれと頓に檢屍の有司派出し屍を見て立歸り府尹廳には豫て建酷捕縛の爲め探索有しが彼杵の藤枝を害せしも同賊成らんと卒然に捕手を増て嚴重に搜索なすに日見峠の山中にて賊を認め多人數を以て取囲めば忽々賊の巨魁妖術もて大ひ成蟾蜍と變ぢ其口より霧を吹ふ小賊は之に隠れ逃去り捕手の者其蟾蜍に鎗を入るよ勿々立す打ども少しも恐る色なく漸して霧はれし後賊と其處ふ非せして蟾蜍と見へしは巖石なりぬ其後ち小賊を只一人捕へ之を嚴しく責けれと明白に露吐せり依て舟を出し賊船を囲み召捕んと爲み速何所へ遁走せり

○孀婦阿花甲幹喜造を猶子に爲とする條

斯て赤穂屋徳兵衛は開業の日より勉勵爲し生業よ由斷なく爲ければ月々に盛大と成り十年の後も承應紀元に至り家族も十餘名暮し長男徳太郎は十五才少女阿富も九才と成り次子徳藏と云る甫て七才の男兒も有りぬ此時徳兵衛は年既四十一才と成て殷富して豊ある身と成ぬるが環が實家の岩井の家四五年前より災害重かり家父了庵も死没りて慈母のその後遺り零落の身と成れば徳兵衛之を引取りて養育し又恩人の天王寺屋を近曾え資金を減し以前の如く非され徳兵衛金を貸與して力を盡して補翼せり家業盛にして貯蓄の金も多のりし天王寺屋が不如意と成りしと戸主武右衛門一人も實子無さむより和泉堺の津ふ住せる親戚紅屋清右衛門の次男豊三郎と云るを未だ十三才の時貴ひ受て嗣子と定め置たりし其慶安二年に(四年前)武右衛門没し豊三郎を武右衛門と改名致させ遺言により直ちに家督を續しむ之豊三郎二十歳の春の事成りしが其年の夏より武右衛門花街に通ひ初め養母阿花徳兵衛も度々諫諍を爲とせ止す娼妓に馴染を出來て宅を家とせず夜泊なす事多し之が爲に父武右衛門が貯蓄せし金も減しか心孀婦阿花徳兵衛始め京都の舍兄二文字屋善助其他の親戚と

も参定爲し同三年の秋、婦婦阿花戸主と成て豊三郎を離縁して堺の實家へ還らしむ而して赤穂屋徳兵衛代判人とは成さり斯て一年も経ざる中に阿花徳兵衛と談じて謂之妾こと眞人の跡を續ぎ貴公お代判後見を依頼ねけを眞に安心にて御座を京都の舎兄の申ふ女戸主は三年限りなれを貴公共示談して誰成と猶子と定め家督を譲る可しとの事つくぐと妾懐へるに心知れざる者を貴ひ受けて豊三郎の様成こと有らば家の爲に可しからん幸ひ篤實に侍へ心甲幹の喜造を猶子と爲さむ能心も知れ侍れを可しと歎と存ひ侍ふと云ふを聞て徳兵衛は漸思惟一夫を可しからん歎併ながら未だ月日も有れを急ぎ玉ふ余も思家の事なれを捨れく事と決して非すと應へるに阿花と些し不満顔色成れを環と傍より機嫌を取り四表八面の談柄を爲し阿花は些し酒を好む環と酒肴を出して徳兵衛實母と共に饗應を阿花と喜び酔て歸れり此甲幹喜造といふと小僕の時より天王寺屋に在りて今は年も廿二才と成りたり喜造天性好男子めて前に豊三郎が花街に通へる時も俱に遊び今も時々登樓なせ共元來阿花と喜造が男より好を愛て小僕の時より鐘愛豊三郎を離縁せし後ち喜造と密會し猶家財も與へ度思ふより猶子に爲んと云るあり徳兵衛は之知れば急に非せと答へ阿花が不貞を諫め

たく思へ共徳兵衛夫婦今の身と成まで亡武右衛門阿花には親戚にも優れる大恩あれば知り乍ら忍へれりしなり

○善助天王寺屋の家補佐する條

天王寺屋の婦婦阿花は甲幹喜造を寵愛あす事日々に深く幾んど我夫の如く爲せむ全家の者喜造を憎み阿花を誹謗り阿花は其誹るを聞け可否も考がへ無く頼に召使ふ者暇を出し周徒者と來るを斷ぐる其我意を振ふ事甚だ敷殘酷爲つた多ければ徳兵衛夫婦こそを閑度に眉を蹙めり徳兵衛種々お思慮を回らせ京都の二文字屋へ信書を以て之を告れば善助は直ちに下坂し天王寺屋おは行せして赤穂屋に來れ徳兵衛と喜悅して善助を客室に請ト茶菓子を出して會釋終れば環も慈母も來りて禮を竭し酒飯を饗應し而して天王寺屋の事件を徳兵衛逐一に善助に物語れば善助聞て呆れ其は甚だ不体裁の事にて打捨難し君に深く苦心致させ恐縮せり頼に余行きて女弟を阿責致て喜造を追出す可しと發憤て云ひけるを徳兵衛之を止め失敬成る事乍ら其計らひ成らぬ態々下坂は願とす余代判後見の權理も有れば頼に爲すべけれと其如く爲て動れ心事を誤まれるあり甚だ迂遠なる事には有れ貴君方今は商

業は善太郎ぬしに委ねてお手透のお身と推量れを少時天王寺屋の身代を預かりを願ひ度此儀御承諾あらむ此頃長崎も商用も有れを先余喜造に之を命トて預足させ其後に阿花ぬしに能く諫め協議致して嗣子を定め若不服の事も有る是非に及ず隠居を致させて万緒我等が親戚中と商議お及びて阿花ぬしの意を用ずして家督相續の事を爲んと思へり何分喜造を示談中退ぞげざれば悪く此にて暇出さむ阿花ぬしの氣質として如何成事を爲玉はんぞと思は斯計ふが善一と歎と余は思へり此儀如何と述べれば善助掌を拍て此儀道理あり色情と他の事と違ひ老若によらず思案の外にて事あらだてを短氣を發して不慮の舉動を爲すあり尙命老如く女弟は一徹成る者なれば前後を辨へずして世間の物笑ひと成べき事を爲さん共云へず喜造も又由斷成らねば遠方へ遣はすも可なり余及へず乍ら天王寺屋の家を預り家督を續べさ人も定め身代を渡すべしと決談おして其宵は善助赤穂屋に宿り翌る朝船上りの有様にて天王寺屋に至り徳兵衛も翌朝喜造を呼て卒然長崎の要用を命ぞ其日出港の船へ乗せて遣としける嬪の阿花と不意に舍兄善助の來りて家督の示談を爲さんと云ひ又愛て密會を娛樂し喜造は長崎へ下り商用の都合よりては一二年を歸らざるの赴ひと故心の目算大に差

ひ而と柔和お舍兄を接待ども如何計ふ可きかと思ひ惱めり扱善助と万事徳兵衛と協議して天王寺屋が商業上の諸般より日々の會計内証のこと迄を女弟阿花に聞て調査喜造も代理て店を監護り阿花が我意を以て不体裁なる事を爲さんとせむ言柔かに訶り止させ甲幹小僕家婢を愛して不勉強あらば阿責して邪正善惡を辨別し冗費を省きて欠亡を補なひ前に阿花が暇つかはせし者も篤實忠誠あると呼て使ひ給ての事を寛仁お正しく爲て天王寺屋が家を補護すのら内外の的僉悦喜を爲つれ共阿花と些都合あしく昨日迄阿花に媚へつらひ機嫌を取て我益と爲せし者等は早晚退ぞき來らざる様ありにける

○甲幹喜造丸山の娼妓八重梅の色に耽る條

斯て善助徳兵衛は天王寺屋が永續を計り親族等共協議して相續人を定むるに徳兵衛が次男徳藏を戸主と爲し善助も其後見を依頼せんと云れ共徳兵衛之を辭退み善助が次男善五郎は年も相當にして阿花とも叔母甥のよと成れば是こと可なるべいと云へるに阿花も善五郎成らむ我身の親族もある之を我子と爲たり由を演べければ竟に各人決議して承應元年の秋善五郎大坂お下り家父の善助と共に天王寺屋が家業を勉めり案下休題天王寺屋が甲幹喜造と同

比年の五月中洗長崎に着し徳兵衛の命ぞたる天王寺屋より先年山鹿屋衆祐へ貸與へし爲換
 金を受取らんと對談に及び日々山鹿屋へ行き促せ共百金の調達容易に出来難く爲す數日
 滞留なす赤穂屋の要用にて永井小岸蜂谷が邸宅へも行って懇應ふゆひ喜造は永井半左衛門
 山鹿屋が事件を談じければ半左衛門も知己の天王寺屋が事あれば喜造に力を添へ家人庄
 六周徒者の大村屋勇造あをを喜造と共に山鹿屋へ遣とし衆祐へ早々金調して返辨なす様に
 促しければ六月の上旬衆祐三十金と喜造に渡し殘金七月中洗に渡す可と云ば喜造之を確
 と約し而して旅舎へ逗留せり此頃喜造丸山の賞花樓の娼妓八重梅に馴染し山鹿屋より三
 十兩の金が手に入るより喜造の悪念發し得たる金を大坂へは送らば懷中に入れ丸山に行
 八重梅を揚酒宴して遊び其次の日を居つけ爲し豫て八重梅が喜造に頼める無心の金もや
 り猶繁々丸山を通ひて金をつかひ山鹿屋方への掛合は大に怠り初の程より反對して緩み
 り又衆祐と元來狂惑なる氣質の者あれど滯金返却を延さんと欲ひ居る折のら喜造が丸山に
 通ひ八重梅を迷ひて頻に打込ひを聞き之ぞ我幸ひなり一手術を設けんと豫て惡意ある丸山
 の幫間團八と示談して喜造に金を遣ひ果させ此地に居難き様に爲さんと工みたり爰も又長

崎に在留せる支那人も春琴江と云る有りて之も八重梅の色客と成り屢々賞花樓に來り喜造
 と八重梅を競ひ揚るに喜造は之に負じと金を請て八重梅を側におけし琴江は發憤て金を費
 し借て八重梅と樂しめり此く争ふ時から幫間の團八が仲居と密に談じて種々の流言を云
 喜造を煽動なすに喜造と彌々琴江と張合ひ三十金を遣ひ無し山鹿屋に迫れ共衆祐と彼是ど
 偽り言延して金を渡さば大坂より山鹿屋の受取し金を早々遞送べしと徳兵衛善助より催
 促の書簡數通來り丸山の揚代旅舎の拂ひに金を要用なれ共手に入らば喜造と甚だ困りて永
 井を始め那方這方にて二兩三兩の金を借て揚代旅館料を拂ひしが又八重梅の無心の金索を
 爲すも迫り己が衣類を典物と成し尙丸山に遊びしが七月中洗に至りて山鹿屋は違約して
 宅に居る妻に催促すれ共勿々果す出訴に及むんと爲れば中裁人に止められ己が借し金は期
 限過て厳しく取立られ大坂より促され共既に三十金は無く左哉せん右やと思案お塞がる時
 丸山より數々文を送りて八重梅が招くに喜造は爲方つさ山鹿屋の事は打捨て長崎の旅舎
 を夜にまぎれて脱走せり

○善五郎天王寺屋の戸主と成る條並嬪婦阿花不行狀の事

天王寺屋が甲幹喜造と娼妓八重梅も迷ひ大金を遣ひ果して長崎も逗留爲し難く馬關まで辛うじて來たりしが今は旅費も盡て如何せんと思へるに江州の佑客高島屋總吉も出會是も旅費を借んと長崎より此地に出る途にて賊難に偶ひ旅荷路用金も奪れ困難に及ぶと偽り云へば總吉は同國の者といひ特に喜造とは竹馬の友にて親しき成れぬ金一兩貸わたへたり喜造大お怡々て押戴死總吉に禮を述て立別れ乗船して一まづ大坂へ歸り天王寺屋方へ歸らず共又工夫も出んと船場へ至りて總吉も借たる金を出さんと懐中を見るも何暇に落せしや有らざれを喜造と船にも乗れず大に當惑し馬關に止まり又九州の地をさまよひ竟るに落せしや有しく落魄れける話易つて大坂天王寺屋には承應二年の初春も善五郎に家督相續させ全家親族祝しける而して善助の京都の自宅へ引とり善五郎は養母阿花に孝順し徳兵衛と万緒協議して家業を勵み勉め甲幹小僕を憐れみ使ひ願主來客周徒者まで叮嚀お接待ければ善五郎の聲譽よく故武右衛門在世の時の如く繁昌を來せり斯て其翌三年の二月天王寺屋が縁ついき成る同宏大坂の倉橋屋太兵衛の處女阿種と云へる甫て十八才に成れるを媒介を以て縁組なし佳辰を撰みて婚姻爲しぬ阿種容貌うるはしく心優しく孝貞を竭しぬれば善五郎と愛睦じ

く暮し阿花も慈愛みたり斯て半年計りも經て善五郎阿種の夫婦の情の濃かに成に隨ひ姑め阿花と妬心を發し阿種をところく惡み出し種々の無理を云へ共阿種は之にさからはす勉むる程日々に募り善五郎も惡様に告げ阿種も良人よ阿花が惡を泣て告げれば善五郎も宥め論し或ひは阿り或ひは阿種が心を慰さめ和ぎ親しみ暮せるに阿花は嫉妬止せして其年を秋ふ至るを其身と耻を願みず阿種が良人と側近く座すも白眼て寄つけず夜闌ては善五郎夫婦の閨房近々來りて睦語を妨たげ時としては惡口吐き或ひは大お咲ひける事幾んど瘋癲の所爲に似たり之によりて貞婦の阿種も愁く思ひ堪かねて實家へ遁飯れぬ阿花は又之を怒憤り使ひを以て阿種を迎へ歸れを復妬むこと以前も變らず善五郎も困難なれば京都の家父の方へ信書に委く書かせて贈り又赤穂屋の夫婦にも密々語れば僉頼ひを撫て當惑せり善助は捨置難しと思へるより下坂して阿花を諫め阿種を愛憐し善五郎も何歎と言含め徳兵衛夫婦にも万事の注意を頼みて歸宅せり此後阿花と善助の諫に悔悟せし歎又如何思ひしか阿種を惡み夫婦を妬むは止たれ共友を誘ひ或ひは己が心に叶ひたる者を扈從につれ劇場物見遊藝に出ること太だしく家に邂逅在る時は人を集めて酒宴なし自恣放逸ある事言語も竭しがたれ

程にして金銭を費すこと多し善五郎と眉をひそめ困りぬれ共慈母といひ其身入家の身なれば之を止めぬたり然れ共漸々と冗費を多く成り所業を悪きに迂りぬれば親族を招きて衆議を爲し其年の暮に至りて阿花を別に隠居させ善助徳兵衛其月々の賄ひ料の金額を定め之阿花よも善五郎にも得心させたり阿花不行狀を誠められ隠居の身と成りぬれ共未だ正しき心と成す又密々姪事に心をよせ好ける男を引寄戯れり

○徳兵衛嫡子に家督を譲る條並徳右衛門隠元禪師に謁す事

徳又赤穂屋徳兵衛が家は天王寺屋に競ぶれ最ゆたかにして家業も倍々榮む全家和睦くして各人其あす業を勉強せり然れど戸主徳兵衛は近習多病あるが故從弟ある高松清兵衛が子新兵衛を京都より招き是を商業の支配人と爲し万治元年長子徳太郎も廿一才と成ば徳兵衛と改名させて家を續せ家父徳兵衛と徳右衛門と更隠居の身と成ぬ同じ年の春三月徳右衛門處女阿富(甫て十)次男徳藏(十三)と伴あひて上京一洛西嵯峨の嵐山なる虚空藏菩薩の請で大悲閣の傍らに有る角倉玄之が建られたる其家嚴了以の碑を拜し(此碑文は林道春の誌上よ坐すなり)山を下り櫻花を看て高松二字屋を訊問し阿富徳藏お所々の名勝社寺舊跡

を見せ徳右衛門と角倉氏へ安否を伺ひぬ此頃徳右衛門若年の寵偶をうけし與市郎と老て素庵と號し其子息家を續て與市郎と名のれい徳右衛門は各人面謁せり時に主人與市郎の謂らく一昨年宇治の里黄檗山万福寺を創立有し明僧隠元禪師を明日私邸お招請せり幸ひと來る成れを明日と來りて拜謁を爲す可しと徳右衛門有難しと應へて各人お暇を告げて高松の宅よ歸り翌日又角倉に行ふ隠元禪師徒弟を五名具して正廳お坐と與市郎素庵禮を竭して齊を饗應せり其事了りて後ち與市郎徳右衛門を呼びて禪師を拜せしむ徳右衛門入室に踞して拜禮をなせば素庵禪師に對ひ渠と拙者の下人あて徳兵衛と申し先年御朱印船にて貴國及び後印度天竺に商業の爲め拙者代理として航海爲さしめし的に侍ふと披露有れば禪師と然なるものと宣ひて徳右衛門を見玉ふ徳右衛門と謹んで三拜九拜す此時徒弟の僧の中に徳右衛門門をつくぐと見て言を發し度爲す僧あり其僧師の免しを受て正廳を起ち小室に徳右衛門を招き丁寧に禮して後ち云へるお拙僧は俗たりし時安南に在りて玉芝の子の玉峯成るべしと名のるよ徳右衛門能々見るに其人成れを改めて會釋なし沈玉芝が安否を問ふよ玉峯の云と家嚴慈母共に五年前喪し菩提の爲に僧と成りて禪師の徒弟と成しと語る徳右衛門は思有

人なれば玉芝の死を悼み尙物語りの盡さる中玉峰を師の召玉へ心餘波おしげに正廳へ行ぬ
徳右衛門と禪師立歸り玉ふ後ち角倉あ於て饗應よわひ其日黄昏ふ高松の宅にかへれり徳右
衛門十日計り京都に逗留して下坂なしける

○赤穂屋徳兵衛子孫繁榮の條

徳右衛門は圖らずも航海せし時厚く恩をうけし沈玉芝が次子玉峰に偶ひ久々の物語りの盡
すして別れしかを其後ち宇治の黄檗山あ至り僧玉峰あ面會して昔時を語り貴僧日本に於て
二寺の住職と成り玉とい其時は我盡力して周旋爲すべし是は今日参り侍ふ土産なりとて金
二十両を玉峰に贈り又二十両万福寺あ納めて歸宅せり而して後ち万治三年阿富も十七才と
成ぬれば原若井了庵の門人成一清水潔齋が子の真太郎を婿あ迎へ阿富と配偶させて岩井の
宅の再興し其後二年を歴て寛文二年に徳兵衛に天王寺屋の媳婦阿種が女弟阿米を娶りて全
美を盡し婚姻の式を行ひ次男徳藏は寛文の七年あ分家を致させ其身と同老十一年に薨髪し
名を宗心と更へ上鹽町に庵を建て住み安樂にくらし延寶八年に六十九歳にて没したる猶其
家代々續き榮わたりとぞ是に反して天王寺屋の婿阿花と隠居の身と成りて後ち善五郎夫婦



天 五十四
にも耻す日來周徒となそ按摩菊平を引せ酒色の娯樂に耽り後ち風癩と成りて死したり又
前よ天王寺屋の甲幹なりし彼喜造と九州の地よ徘徊して竟おは乞丐と成り大坂に歸り而し
て悪心増長し竊盜となつて人家に忍び掠奪を爲そわ一年を歴る中に囚人と成りぬるとぞ
嗚呼人の榮枯苦樂と其身の行狀によりて變れば謹むべしなり

天竺德兵衛實記終

明治廿一年十二月十一日印刷
全 年十二月十四日出版

發行者 大阪南區安堂寺橋通四丁目
二百四十二番屋敷 田中 太右衛門

發行者 大阪南區順慶町通四丁目
百七十九番屋敷 此 村 庄 助

著作者 大阪東區龍造寺町十八番地
柳 澤 武 運 三

印刷者 同南區長堀橋筋二丁目八十番屋敷
前 野 茂 久 次



版權所有

